

1-4				
主題	地域の子どもは地域で育てる			
副題	入居者と共に			
キーワード 1	地域育成	キーワード 2	自立支援	研究(実践)期間 30ヶ月

法人名・事業所名	社福) 福音会 軽費老人ホームA型町田愛信園			
発表者(職種)	鈴木恵(主任管理栄養士)、渡辺修(主任生活相談員)			
共同研究(実践)者	鶴田尚子(施設長)			

電話	042-734-0631	FAX	042-860-5770
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	1983年に特別養護老人ホームと共に開設し、60歳以上で家庭の事情により、自宅での生活が困難な方が食事や入浴の提供を受け、日常生活のサポートを受けながら集団生活をし、個々の生活スタイルを尊重し、自立した生活を送ることができる施設です。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

2014年10月から開始した地域町内会との「男の料理教室」の打合せの中で、入居者が参加できる地域活動の相談をした処、子ども会会長を紹介され、その子ども会会長を通して地域の抱える課題を伺うことが出来た。それは、当地域が、3つの小学校の境界にあり、学校を選択できる一方、異なる小学校の子どもたちの間では隣合わせでも交わりが希薄になりがちであるということ。そのため、子ども会役員が同地域の子どもの交流を支援してきているということであった。子ども達と共に育むこうした地域活動を当法人でも支援してほしいとの依頼であった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

子ども会役員が、場所・人・資金がない中で行ってきた地域の子ども育成を、地域住民に啓蒙し、地域からの支援を得られるようにしていく。そのためには、施設を開放したり、高齢者福祉施設が持っている食や文化継承のノウハウを生かした多世代交流事業を、地域住民や入居者と共に計画することが必要ではないかと考え、以下の仮説を立てた。

- ①地域で別々の学校に通う子ども達と保護者の交わりの機会の一助となるのではないか。(地域育成)
- ②子ども食堂を立ち上げることによって、より多くの地域住民の方々が、地域で子どもを育てていくことに関心を抱けるようになるのではないか。(地域啓蒙)
- ③入居生活の場で受け身になりがちな入居者が、主体的に生きる喜びを描けるようになるのではないか。(自立支援)

《3. 具体的な取り組みの内容》

地域の子ども会と連携し、当施設を会場として子ども会の交流会を企画。準備作業として、法人内に「地域活動委員会」を発足させ、予算化し、年4回の交流会を行い、入居者は、出来る範

団内で子ども達との交流に参加した。毎回、調理や遊び道具の制作・補助等で参加を募った。入居者が、「自分に何か出来ることはないか」と考え、割りばし鉄砲の作成や干し柿づくりといった、それぞれの得意分野で地域の方々と交流を行うことが出来るようになった。子ども会の参加者からは、「野菜が苦手な子どもが、交流会だと豚汁をいっぱい食べられる」との声が聞かれている。また、地域住民の方々に活動の支援をお願いし、毎回数名の参加を得て活動のサポートをして頂いた。

《4. 取り組みの結果》

仮説についての結果は以下の通りである。

- ①子ども会支援を2年積み重ねる中で、参加子ども会が一団体から四団体へと広がっていき、地域の賛同を得て子どもたちと保護者の交わりの一助となった。回数を重ね、継続していくことで、地域の方々と一緒に支えあうような環境を整えている。
- ②子ども会支援の中でその役員より子ども食堂についての相談があり、社会福祉協議会から、地域の活動拠点を紹介された。また、食材の確保としてフードドライブ並びに日頃お世話になっている地域の企業や個人の寄付を募った。参加者並びにボランティアの募集告知として、地域の回覧板に配布を依頼し広報活動を進めた結果、地域の多くの方々から賛同を得られた。
- ③子ども会においても、また、子ども食堂においても、入居者が昔遊びの伝承や季節の食材についての話をすることで、食育を含めた展開となっている。入居者においても、「今度はこれにしようかな」と日々考えながら、やりがいを持って生活している。

《5. 考察、まとめ》

地域課題の解決に繋がったかどうかを明確に示すことが出来ないものの、子ども会の活動に寄与することで、地域社会の活性化の一端を担えたと感じている。軽費老人ホームという自立型の施設において、入居者の方々が協力出来る範囲は広く、また、人の役に立ちたいと思う方が多いので、その力を地域から求められる活動に繋げることが出来れば、この活動は入居者そして地域全体の活性化となる取り組みになる。

地域活動の展開において生まれた子ども食堂においては、地域住民による多くのボランティアを得ているが、一方こうした活動を必要としている子ども達の参加に繋げていくことが、課題と言える。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得ることとした。

《7. 参考文献》

- ・「こども食堂」の混乱、誤解、戸惑いを整理し、今後の展望を開く (Yahoo! ニュース)
<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20161016-00063123/>
(2017年7月18日閲覧)

- ・「冒険遊び場がやってきた!一羽根木プレーパークの記録」(1987) 羽根木プレーパークの会、晶文社

《8. 提案と発信》

地域の抱える課題を、地域にある施設の入居者が共に解決していくことによって、この地域における社会参加型の活動がより活発となり、やがてはより幅広い世代間、業種を超えたネットワークの形成となることを期待したい。